

以上、本書に対する評者の疑問を述べてきたが、これはあくまでもメラネシアの人類学を専門としていない門外漢のものであり、本書の学問的価値を何ら減ずるものではない。なにぶん大部な著作なので正直読むのに少し時間を費やしたが、本書を一読して感じるのには、人類学の理論的行き詰まりをなんとか打開しなければという若々しい気負いと、著者のフィールドでの興奮と「クサゲの人々」への深い愛情である。いわば手探りの状態で本格的なフィールドで出かけていき、そこでCFCという「金脈」に出くわし、その調査で様々な出来事や出会いを体験した著者の喜びと気持ちの高ぶりが伝わってきて、評者を久しぶりに新鮮な気持ちにさせてくれた。本書は、まさに人類学の次代を担う若き俊英の情熱と力が横溢する力作だといっていだらう。なお、些細なことを一つだけ。一八三頁の引用の「はじめに、言葉だけがあつた」は、『創世記』ではなく、『ヨハネによる福音書』の誤りではないだろうか。

ケネス・タナカ著

『アメリカ仏教』

——仏教も変わる、アメリカも変わる——

武蔵野大学出版会 二〇一〇年五月二〇日刊

A5判 三三五頁 二〇〇〇円＋税

岩 本 明 美

本書『アメリカ仏教——仏教も変わる、アメリカも変わる』は、アメリカにおける仏教についての概説書である。「日本の読者を対象とし、特定の国由来の仏教や特定の宗派に限らず、アメリカ仏教全体を総合的に解説することを目的」としている。このような目的をもって書かれた日本語の書物は、これまで存在しなかった。

本書の著者、ケネス・タナカ氏は、アメリカ国籍をもつ日系三世で、サンフランシスコ近郊に育つ。カリフォルニア大学バークレー校で博士号を取得した仏教学者であり、また浄土真宗本願寺派の僧侶でもある。現在、武蔵野大学で教鞭をとる。著者の中学・高校時代にあたる一九六〇年代前半当時の一般アメリカ人の仏教認識は、「おへそを眺めながらするアジアのカルト」程度に過ぎなかった。著者は、「あなたの宗教は何ですか?」と問われても、引け目から「I am a Buddhist」とは言えず、「I go to a Buddhist church in town」と答えていた。だが、彼の三人の子供たちは、そうではない。正々堂々と、「

am a Buddhist”と言えるように育った。アメリカの仏教状況は、一九七〇年代後半には、一変していたのである。

現在アメリカには、アジア諸国で発展したおおよそありとあらゆる仏教宗派が上陸し、ユニークな成長を遂げている。評者がこの事実を知ったのは、学位(課程博士)取得後二〇〇二年夏に渡米した折である。評者は研究上、サンスクリット・パーリ語・チベット語・漢語の仏教文献を扱う。アメリカで、テラワダ・チベット・禅仏教などの寺院やセンターを訪問する機会を得て、それら古典世界が生命を持ち始め、とても面白い。

その面白さを伝えようと、二〇〇四年に帰国後幾度か日本の大学でアメリカ仏教について教えたことがあるが、それをテーマとした日本語の概説書(教科書、参考書)がなく苦労した経験をもつ。本書は、評者にとって、まさに待望の一冊なのである。

一九九〇年以降、アメリカでは、アメリカ仏教の研究が急速に進展し、次々に関連書が上梓されている。その冊数は相当な数にのぼるが、本書の著者がアメリカ仏教研究の第一人者の一人といえるC・プレビシ氏とともに編集した、*The Faces of Buddhism in America* (Berkeley: University of California Press, 1998) は、アメリカ仏教の特徴をよく捉えた基本論集として今も頻繁に引用される。

本書は、それとは執筆姿勢を全く異にする。著者が、「単に客観的な論述や狭い意味での学術研究書にとどまらず、私のアメリカ仏教の体験も交えながら、客観性も持つ一般向きの本を目指すことにした」と述べている通り、本書は幅広い読者を対

象にしたものである。章立ては、以下の通りである。

序章 伸びるアメリカ仏教

第一章 現状 仏教人口と種類

「一」仏教人口 「二」仏教徒の種類 「三」主な団体・寺院・センター

第二章 浸透 一般社会

「一」マスコミの注目 「二」著名人 「三」映画・テレビ番組

「四」書物 「五」大学の仏教教育

第三章 歴史 十大出来事

「一」一八四四年 学会での仏教の紹介——知識人による導入
「二」一八五三年 中国人による仏教寺院の建立——アジアの生きた仏教の渡来 「三」一八八〇年 白人仏教徒の誕生——日本やアジアとの交流 「四」一八九三年 万国宗教大会——キリスト教と肩並べ 「五」一九四二年 僧侶の逮捕——移民社会と仏教の役割 「六」一九五八年 『ザ・ダーマ・バムス』の刊行——一般社会に影響するビート仏教 「七」一九六二年 サンフランシスコ禅センターの開始——実践道場の誕生

「八」一九七四年 インサイト・メディテーション・ソサイエティ——新しい形の仏教 「九」一九七六年 創価学会の建国二百年祝典——アジア宗教のアメリカ化 「十」一九九六年 米国副大統領の仏教寺院への訪問——移民仏教の社会同化
第四章 特徴 アジアの仏教と比較して

「一」平等化 「二」メディテーション中心 「三」参加仏教 エンゲイジド・ブディズム 「四」超宗派性 「五」個人化宗教

第五章 解釈 アメリカへの同化

「二」科学 「二」心理学 「三」環境 「四」「この世・今」の重視

「五」仏教ユーモア

第六章 原因 全体の伸び

「二」宗教の重要性 「二」宗教情勢の変化 「三」東洋宗教の魅力

力 「四」仏教特有の原因

結び 仏教も変わる、アメリカも変わる

目次から察せられるように、本書の内容は、一般書という性格上、広く浅く多岐にわたる。そのすべてを紹介することは紙数的にも無理なので、学術的により興味深く、学界であまり知られていないと想像される事実を扱っている、章や節に絞ってその要旨を述べたい。

第一章では、仏教人口の増加が示される。著者のいう仏教人口とは、三つのグループから成る。仏教徒(Buddhists)と、仏教同調者(sympathizers)と、仏教に影響されているもの(those influenced by Buddhism)である。本書では、自分が仏教徒であるという意識を持ちながら、仏教的な行為を行う者を「仏教徒」と定義している。彼らは、必ずしも仏教組織の会員である必要はない。第二の「仏教同調者」とは、仏教的な行為を行うにもかかわらず、特定の仏教寺院やセンターとは深い関係を持たず、自分が「仏教徒」であると断定していない者という。著者は、「仏教徒」を三〇〇万人、「仏教同調者」を二五〇万人、「仏教に影響されている者」を二五〇〇万人と見積もっている。

次に、仏教徒をどう分類すべきかが議論される。アメリカでは日本流の宗派による分類は通用しない。二種、三種、四種のグループに分ける、三つの分類法が示される。第一は、C・P・レビシが使う分類で、移民と改宗者との二種に大別する。移民とは、アジア諸国からの移住者である。他方、改宗者とは、親が仏教徒ではなく、自分の意志で仏教徒となった人たちで、彼らのほとんどがキリスト教やユダヤ教の家庭で育ったヨーロッパ系(白人)とアフリカ系(黒人)である。

著者が提唱するのは、(一)旧アジア系仏教徒、(二)新アジア系仏教徒、(三)瞑想中心の改宗者、(四)題目中心の改宗者の四種のグループに分つものである。(一)は、伝来から百年以上を経過した中国や日本からの仏教を継承するグループである。(二)は、一九六〇年代後半以降、主として台湾、韓国、東南アジアから渡来してきた仏教徒である。(三)は、(一)ほどにはアメリカへ同化しておらず、そのグループでは祖国の文化が重視され、ほとんどの場合母国語が使用されている。(四)は、禅、チベット仏教、及び東南アジア仏教の三系統に所属し、多くは、大学卒で、中流階級以上であり、また大半は白人である。(四)は、題目を唱えること(chanting)に専念するSGI-USA(創価学会インターナショナル)の改宗者を指す。白人だけでなく、黒人やヒスパニック、アジア系の多様な人種や民族からなる。またその所得層も幅広い。著者は、この(一)～(四)の仏教徒の数を、大雑把にそれぞれ、二五万、一三五万、一三〇万、一〇万くらいとしている。

第三章では、仏教の発展の大まかな流れを、十の画期的な出

来事を通して見ようとする。最後の出来事は、一九九六年のゴア元副大統領の西来寺訪問に伴うスキャンダルである。西来寺は、台湾の四大教団の一つである佛光山のアメリカの拠点で、一九八八年にロサンゼルス郊外に建立された、アジア圏外で最大の仏教寺院である。ゴアがそこを訪問したことによって、結果的に約一四万ドルの寄付金が集まった。そのため、間近に控えた選挙の資金調達が目的であったかのように受け取られ、この一件は、大きな政治的事件へと展開した。意見は多岐にわたり、仏教寺院がそのような事件に関与したことを恥じる仏教徒もいた。だが、著者自身は、アメリカ仏教の発展という観点から見て、これを画期的な出来事とみなす。というのも、仏教寺院が他の宗教団体と同様に政治活動に参加するようになったからである。また、この事件を報道した種々のメディアが、仏教をアメリカの宗教として扱ったからであった。「仏教は、一九五〇年代以降には、アメリカ的要素を取り入れながら急速な伸びを遂げ、現在『東洋のみの宗教』というイメージを脱却し、『アメリカの宗教』の一つとして成長」したのであった。

第四章では、「瞑想中心の改宗者」に焦点を当てて、アメリカ仏教の特徴が五点にまとめられる。彼らに焦点を絞る理由は、アジア本部から組織的に独立しており、アメリカ化的特徴が顕著に見られるからである。第一節(平等化)では、(一)在家を志向する傾向、(二)女性の地位の著しい向上、(三)仏教の同性愛者に対する寛容な態度があげられる。アジアの伝統仏教では、出家者が在家者より優位であり、出家者は在家者に敬われ、生活を支えられている。しかし、アメリカでは、組織を主

導する立場にある者でも出家しているものは極めて少ない。その理由として、出家者をサポートし得る制度的基盤がないことや、仏教に魅力を感じる人には厳しい戒に縛られたくない者が多いことなどが指摘される。第二の特徴は、メディアーションを中心に受容されていることである。アメリカでは、儀式や教義よりもプラクティスが重視されるのである。第三は、参加仏教(エンゲイジド・ブディズム)が比較的盛んなことである。その背景には、アメリカでは「本物」の宗教は社会の問題に取り組み、人々の苦しみや問題に関わる、という考えがある。

第五章では、アメリカ人が仏教をどう解釈してきたのか、それを五つの主題のもとに検討する。最も顕著なのは、仏教の心理学による解釈であろう。著者のいう心理療法をも含む心理学は、アメリカが仏教を導入していくうえで大きな窓口の一つとなってきた。心理学と仏教をテーマにした数百という書籍が、今日アメリカで販売されている。

心理学と仏教を協働させることによって大きな成果を挙げているのが、セラピストのジョン・ウェルウッドである。チベット仏教の三十年以上の修行経験をもつ彼女によれば、仏教はスピリチュアル、心理学は心理を領域とする。つまり前者は、無限で普遍的で絶対的真実を、後者は、有限で個人的で相対的真実を対象としている。スピリチュアルの道には、目覚め(realization)と実現(actualization)の二つの側面があり、「目覚め」は相対的な領域から絶対的な領域への突入であり、「実現」は逆に絶対的な領域から相対的な領域に戻ることである。現代アメリカ社会は、このスピリチュアルな面を受け入れ支えるこ

とが比較的困難になってきており、そこにこそ心理学の役目がある。その役目とは、「目覚め」に対する「実現」の側面を促すことである。つまりは心理学の知識は、一個人が相対的な日常の生活の中に普遍的な仏教の教えを具現化することの手助けとなるのである。

本書では「アメリカ仏教」を特に規定していないが、それはアメリカ固有の仏教のみをいうのではない。アメリカで実践されている仏教全般を指す。それら多種多様な仏教をそれを実践する者の特色に着目してグループ分けするなら、おそらく著者の四分類が最も無難であろう。プレビシの二分類では、著者がそれに焦点を合わせて議論する実践者のグループ（瞑想中心の改宗者）が浮かび上がらない。他方そのグループは、J・ナテイエによる三分類（輸入・輸出・荷物）のうちの「輸入」グループと構成員は一致する。しかし「輸入」という呼称はすぐわない。というのも、本場のアジアから先生を呼んで、つまり「輸入」して始まった集団とは限らないからである。アジアに出かけ修行を積み、帰国後センターを立ち上げた集団も少なくないのである。

その代表的な集団が、インサイト・メディテーション・ソサイアティである。その創設を、著者は、十大出来事の中の第八に挙げる。創立者の四人は、東南アジアでテラワダのヴィパッサナー（インサイト）という瞑想修行を積み、帰国後指導を始めた。その瞑想法は、今ではアメリカ全国にそれを指導するセンターが存在するほど人気がある。

ところで、この第八が第六・七とともに、一九五〇年代以降急上昇する仏教受容（人気）を示す出来事として選択されているのは、別の観点からも適切である。第六で言及される『ザ・ダーマ・バムス』（一九五八）に、禅の思想が色濃く反映していることはよく知られているが、それは、鈴木大拙によって紹介された仏教教理がアメリカで受容された事実を物語る。次の第七の鈴木俊隆老師によるサンフランシスコ禅センターの創始（一九六二）は、坐禅をしたい改宗者のニーズに応えたものであるが、これは仏教が理論から実践の時代に入ったことを象徴する。著者が述べるように、実際、六〇・七〇年代には、鈴木老師のほか、アジア諸国から有力な布教者たちがアメリカに渡り、メディテーションを中心とする改宗者を輩出した。チベットの仏教カギユ派の活仏、チョギヤム・トゥルンパは、その代表である。最後の第八は、アメリカ人によって仏教が完全に消化された一つの事例として受け取ることができるであろう。つまり、第六から第八の出来事は、一つの完結をみた「瞑想中心の改宗者」の仏教受容史として捉え得るのである。（続く第九・十は、「瞑想中心の改宗者」に関わる出来事ではない。）

さて、この「瞑想中心の改宗者」の仏教受容に関して、本書ではあまり留意されていないが、評者には重要と思われる側面がある。それについて簡単に述べておきたい。著者は、アメリカでは、伝統を軽視し集団でよりも個人的に仏教を実践する傾向があること、また厳しい戒律に縛られずに実践したい者が多いことを指摘している。しかしながら、こういった傾向とは逆行する潮流もあるのだ。

たとえば、本書の冒頭でも言及されているアメリカ人老師ジョン・大道・ローリーが創設した Zen Mountain Monastery は、アメリカには珍しく、規律の厳しい禅院(サンガ)である。日本の禅宗が捨ててしまった經典学習などの伝統も復活させている。そもそも大道老師が私淑したチベットの活仏・トゥルンパ自身が、コミュニティで実践することを重視した。現在シャンバラ・インターナショナルと呼ばれる一大組織は、その理念の結晶である。さらに言えば、そのトゥルンパが父のごとくに慕った、鈴木俊隆老師も、本書でも述べられている通り、規律を重んじた。他方、テラワダでも、厳密にヴィナヤを守っているアメリカ人比丘がいる。二十年近く、タイの森林で修行を積んだ、Thanissaro Bikkhu (Ajān Geoff) である。彼はカリフォルニア州サンディエゴに Metta Forest Monastery を創設した中心人物であり、一九九三年以来その僧院長である。そこはアメリカ的なトリートプログラムも提供するが、布施に頼って僧院を運営するほどテラワダの伝統を墨守している。以上のようなサンガによる実践をなお継続させる力は、仏教の本質を考えるうえで、今後吟味する必要があるう。

ところで、ここには、本書が指摘するような、宗派を超えた影響関係もみとることができる。大道老師・トゥルンパ・鈴木老師との三者間で、禅とチベット仏教が敬慕の念でつながっているのである。伝統仏教である禅・チベット・テラワダ仏教を実践する「瞑想中心の改宗者」たちが、今後刺激しあいながら、正統的仏教を是正しつつ、より豊かに、よりフレキシブ

ルにするものと評者は期待している。

さらに、彼らこそが仏教の創造性を生かし、異なった学問領域との連携も計るであろう。著者はこのことを十分に認識しており、心理学や神経学との連携を本書で紹介している。先に触れた、セラピストのウェルウッドの思想などは、非常に興味深い。彼女のいう「目覚め」と「実現」は、往相と還相を想起させ、彼女のアプローチをもっと詳しく知りたくなった。

著者は、本書を、“Today, Buddhism is an American religion” (“Becoming the Buddha in L.A.” video 1993) とこうハーバード大学教授、ダイアナ・エックの言葉で締めくくる。「仏教はアメリカの宗教である」と言われるほど、仏教はアメリカに浸透している。にもかかわらず、その事実さえ、日本では不思議なほど知られていない。ましてや、アメリカ仏教の実態を把握している日本人が、どれほどいるであろうか。評者は、かなりの程度知っているつもりであったが、本書を読んで初めて知る事実も多かった。

著者は、アメリカ仏教を知ることとは、「日本人が日本仏教の将来を考えていくための参考にもなると思われる」と控えめに述べているが、それは大いにあるはずである。わずか「百五十年の歴史しかないアメリカ仏教」であったとしても、「千五百年の歴史を持つ日本仏教」が知らない、正統派的仏教をも含むからであり、しかもその土壤は因襲に犯されていないからである。

著者は、仏教が今後アメリカの総人口の二%を占めるユダヤ教を凌ぎ、アメリカの第二の宗教の座に就く可能性さえ示唆し

『宗教研究』85巻3輯（2011年）

ている。驚くべきことではなからうか。仏教のもつ可能性を日本人に知らせたいという強い思いから、本書は執筆されたに違いない。

秋山 学著

『ハンガリーのギリシア・カトリック教会

——伝承と展望——

創文社 二〇一〇年八月三十一日刊

菊判 XXVI + 七〇二頁 一二〇〇〇円 + 税

久松 英二

著者、秋山学氏は西洋古典学、地中海学、教父学を専門とする気鋭の研究者で、本書は二〇〇一年に刊行された学位論文『教父と古典解釈——予型論の射程』（創文社）以後に発表されたビザンティン典礼学、教父学、西洋古典学、仏教・神道を比較項とする東方キリスト教との比較宗教学等、広範かつエネルギーギッシュな研究活動の成果をまとめたものである。全七〇二頁に及ぶ大著であるということに加えて、その内容の精緻さ、重厚さ、幅広さ、知見の深さに圧倒されるばかりである。

本書は、書名「ハンガリーのギリシア・カトリック教会」が端的に示すように、これまで我が国ではまったく知られることのなかったハンガリーにおけるビザンティン典礼に従うカトリック教会の歴史と現況を紹介し、同教会に見られる典礼の神学を異教文献研究への新たな「光源」とし、古典文献学、古代学さらには東洋思想を「予型論」という著者が持ち続けている独特な解釈学的視座から捉えなおしてみる、というまことに大胆かつ壮大な試みを実現させた画期的研究である。まず、目次を